光らない君へ

～きらびやかな王朝絵巻の時代、光らなかった者達はいかに生きていたのか？～

2024年6月
横浜歴史研究会
真野信治

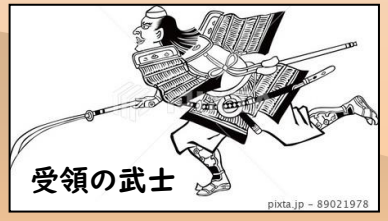
「光る君」が藤原道長であったとして、その一方で光らない君は誰なのか？

紫式部の『源氏物語』執筆を支援し、彼女が才能を発揮できる場を提供した藤原道長。大河ドラマで描かれる道長が「光る君」なのであろうか。しかし、同じ時代には“光らない”人々のほうが圧倒的に多かったことは説明するまでもない。その光らない人々、特に道長の間近にいた人々の生きざまを見てみたい。

因みに、道長とはどういう男だったのか、同時代史料から窺い知ることが出来る道長は？

・繊細であって豪放
・寛容であって残忍
・生真面目であっていい加減
・人前で泣いたり、人前で怒鳴り散らしたり・・・
(泥酔して会議に遅参、天皇の御前で騒ぐ)

このようなつかみどころがなく、いわゆる多重の人格を持っているような人物であったという(倉本一宏氏)



道長は、摂関政治時代の代表的為政者として位置付けられていることは間違いない。
強いて言えば、「あふれんばかりの富を手に入れ、それを宮廷社会に投入し、仮名文字の作者たちが愛した王朝絵巻世界を成り立たせていた男」と言える。が、その一方で、武士たちが受領として収奪した途方もない巨額の貢物を受け取り、かれらを繰り返し受領に任じて、貢物を継続させるサイクルを確立させていた、という重要な側面もある。実は、この二つの相容れない世界は、道長を中心とする一大経済圏の中に共存していたと考えることも可能なのである。すなわち、消費地としての王朝絵巻世界を「光る」世界と考えると、供給地としての暴力的な武士社会は「光らない」世界といえるのかもしれない。

このように、道長のもとに家人として仕えていた武士らは、受領の地位を斡旋されて私腹を肥やし、ついでに任国に受領の支配を確立し、その対価として富を道長や朝廷に還元する、という癒着構造が出来上がっていた。加えて、この藤原摂関家と癒着した受領は免罪特権ともいうべき武器を片手に、非常に荒々しい姿を見せつけている。反面、摂関時代以前の受領は弱く、現地武士らを統括することが出来なかったため、道長らは「強い受領」を求めていたのであろう。実はこのパターンに完全に合致する武人がいるのである。当時、道長、或いは兄道兼、嫡子頼通らと主従関係を結んでいた武士の中には、藤原家の家司(けいし)として仕えていた者もいる。代表的な者として、源頼光・源頼信・藤原保昌・平維衡等々を揚げることが出来る。彼らこそが受領として地方に赴任し、途方もない財産を形成するに至るのである。しかし、暴力的な彼らは決して“光らない”人々であった。

受領とは→
国司四等官の筆頭者で(<u>〇〇守</u>)、令制国に赴任して行政責任を負う者　(例)<u>相模守(*受領*)</u>>相模介>相模掾(じょう)>相模目(さかん)
※但し、上総・常陸・上野国は親王任国なので臣下は「守」になれず、「介」が筆頭者である

清少納言（絵本百人一首）

清少納言は目の前で実兄を殺されている

『御堂関白記』によると、寛仁元年(1017)3月8日、清少納言の兄清原致信が源頼親によって殺害されるという事件が発生している。『古事談』においてはその場に清少納言も同座していたとされる。これは大和守を務めていた致信の主君である藤原保昌が同国内の利権を巡り源頼親（保昌の甥）と競合した際、大和の在地領主で頼親の郎党であった右馬允・当麻為頼を殺害したことに致信が関与したことに対する報復であったと考えられている。一方、殺害の実行犯は頼親ではなくその兄の源頼光の指示を受けた頼光四天王であったとする史料もあり、情報が錯綜している。また、清少納言と言えば、『枕草子』という傑作エッセイの筆者である。彼女は、豊かで繊細な観察眼と筆力をもって宮廷社会を叙述し、その描く世界は、のどかで平和そのものである。しかし、それは思念や生活のごく一部であり、氷山の一角でしかない。兄の事件は、ありのままの実生活が露骨な暴力とそれを生業とする人々の脅威と隣り合わせであったことを示しているのだ。

因みに世間は、加害者の頼親には「また手際よくやったな」と噂し、被害者の致信に同情を示さなかった。つまり、致信もまた殺人犯だったからである。実は、主君の保昌は道長の家司(けいし)であったが、保昌の弟の保輔も殺人や強盗を繰り返した男であった。またその姉妹は源満仲に嫁いでおり、その二男が頼親である。このように、これら一連の人物は、気に入らぬものは虫けらのように殺すことで有名な武闘集団だったのである。

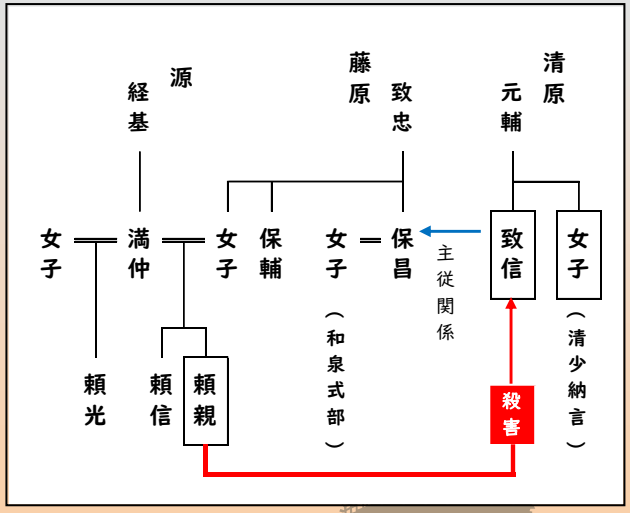
都のすぐ隣に、或いは自分の身内に粗暴で危険で暴力的な武士がいることを、清少納言は十分認識していたであろう。また、保昌の後妻は『和泉式部日記』で有名な和泉式部である。もちろん、彼女たちはこの暴力世界を描くことはしなかったのだが、皮肉なことに、このような暴力的な武士社会が、彼女たちが熱心に描いた王朝絵巻世界を支えていたといっても過言ではないのである。これが「光る」世界と「光らない」世界の具体例である。

藤原保昌

円融上皇の院判官代を務めた後、一条天皇に世において日向守・肥後守・大宰少弐と九州地方の地方官を務め、この間の寛弘7年（1010）正五位下に叙せられる。三条天皇の世、その初頭の寛弘8年（1011）従四位下に昇叙され、長和2年（1013年）大和守兼左馬権頭に任ぜられる。

後一条天皇の寛仁4年（1020）頃に丹後守に任ぜられ、妻の和泉式部と任国に下っている。のち、大和守(再)・摂津守を歴任し、位階は正四位下に至る。また、藤原道長・頼通父子の家司も務めた。

古典『保元物語』や『梅松論』では古来の勇者の代表格として保昌が語られている。因みに、酒呑童子討伐説話も古い形態では、源頼光と保昌が両大将として描かれており、保昌を酒呑童子退治の主人公とした説話もある。



また、保昌の義兄弟である源満仲、およびその子の頼光・頼親・頼信も粗暴で危険な人物であった。が、実はこの一族こそがいわゆる清和源氏という貴種としてのちに“光る君”を輩出することとなる。それが、頼信の後裔であり、鎌倉幕府を開いた「鎌倉殿」源頼朝なのである。

10世紀前半に起こった平将門の乱は、軍事の主役は武士が占める時代が来たことを物語っている。但し、彼らは受領ではない。逆にその当時の受領は、このようないわば群盗と言われる武士団を抑えることが出来ず、結果、地方は無法者の天国であった。そこに摂関家を後ろ盾にし、いわば免罪特権を有した強い受領が生まれてくることとなる。この代表格が、源頼光・頼親・頼信の兄弟であり、平維衡・藤原保昌も同様である。そして彼らのすべては藤原道長・頼通親子と主従関係を結んでいた。道長らは繰返しこの従者らを受領に任命し、その対価として多くの富を中央に還元させていたのである。大国の受領ともなれば、次に任命されるまで普通は10年程度費やすものである。

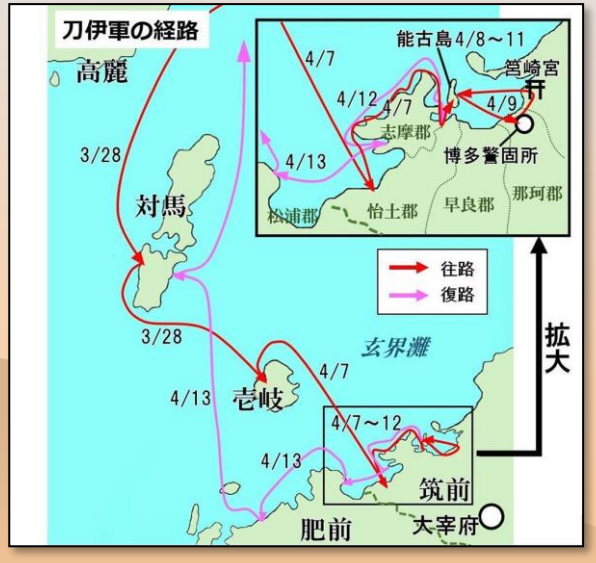
これら受領武士は多少荒っぽいこともしながら、任国で収奪した富を上納し、中央の王朝絵巻社会を支えていたと言ってもいい。このように、摂関政治が全盛のころは全く“光らない”人々であったが、その後裔には、平清盛或いは源頼朝という“光る君”が出現することとなる。

光る可能性があったが、光らなかった道長の近親者

藤原隆家(藤原道隆の四男。官位は正二位・中納言)
11歳で元服して以降、父藤原道隆の執政下で武官を務めながら昇進を重ね、従三位に叙せられる(『枕草子』には三位中将として登場する)。長徳元年(995)4月に権中納言に任ぜられるが、まもなく道隆が没する。そのあとを弟の道兼が関白職を継いだが、これもまもなく没し、5月に入って執政の座は内覧・右大臣となった藤原道長に移る。本来、嫡男筋である道隆の子らが実権を握るところを、道長に搾取されたと考える伊周・隆家兄弟が道長と仲が良いはずはない。ついに7月末に隆家の従者と道長の従者が七条大路で乱闘し、8月初旬には隆家の従者が道長の随身・秦久忠を殺害してしまう。さらに、翌長徳2年(996)正月に兄伊周の女性関係に関連して、隆家は従者の武士を連れて花山法皇の一行を襲い、法皇の衣の袖を弓で射抜くという事件を起こす。このことを藤原道長に利用され、4月になると花山法皇奉射・東三条院呪詛・大元帥法実施の罪状三ヶ条を以って、隆家は出雲権守に、伊周は大宰権帥に左遷されてしまう(**長徳の変**)。

(『愛国物語』より 国立国会図書館蔵)

道長に「天下の**さがな者(荒くれ者)**」と呼ばれた隆家であったが、姉の中宮定子の女房清少納言との応酬など、時折別な顔も見せている(『枕草子』『大鏡』『古今著聞集』に多彩な逸話が伝えられている)。姉が生んだ敦康親王の立太子を実現できなかった一条天皇を「人非人」と非難したり、権力者の叔父道長の嫌がらせに屈せず三条天皇皇后娍子の皇后宮大夫を引き受けたりするなど、気骨のある人物としても知られていた(Wiki)。
『小右記』の作者藤原実資とは仲が良かったようで、実資が隆家に対して眼病の治療と道長からの圧迫を避けるために「遠任之案」を勧め、それを受けた隆家が「深有鎮西之興」を抱いたことが記されている。大宰権帥への任官を望む隆家であったが、未だ声望高い中関白家と九州在地勢力との結合を抑止したい道長に強く妨害される。結局同じ眼病に悩む三条天皇の隆家への同情は深く、決定までに9ヶ月を要した末、長和3年(1014)11月になってようやく大宰権帥に任ぜられた。



刀伊の入寇

大宰府では善政を施し、九州の在地勢力はすっかり心服したという(『大鏡』)。ところが、在任中の寛仁3年(1019)3月、刀伊の入寇という事件が発生した。刀伊("東夷"がなまったか?)が対馬・壱岐に続いて、同年4月に博多を襲うが、隆家は総指揮官としていわゆる鎮西武士団、大蔵種材・平為賢らを指揮してこれに応戦・撃退している(刀伊の輩が日本勢が射た"鏑矢"の音を怖がったと言われている)。同年6月には高麗が虜人送使・鄭子良を派遣し、刀伊から奪回した日本人捕虜259名を送還する。隆家は鄭子良に対して朝廷の返牒を遣わし禄物を与えるなど後処理を行った。
隆家は4月7日と4月8日に事件についての報告書を京都に送ったが、届いたのは10日後、4月17日のことであったとされる。18日には恩賞を約した勅符が発給されているが、主要な戦闘はすでに終結していた。6月29日に行われた陣定では、恩賞が約された勅符が出されたのは戦闘の後だったため、藤原行成・藤原公任が恩賞不要の意見を述べた。一方、藤原実資は寛平6年(894)の新羅の入寇の際の例を上げ、今後のことを考え、約束がなくても恩賞を与えるべきと述べた。これを受け、本来与える必要はないが恩賞を与えることが決議されている。恩賞を受けた例としては、戦闘で活躍した大蔵種材が壱岐守に叙任されている。

こうして帰京した隆家だが、中関白家の声望は彼の双肩にかかることとなった。隆家は外甥の敦康親王の立太子に期待をかける。世間からも、敦康親王が即位して隆家が政治を輔佐したなら天下はよく治まるだろう、との声もあったという。しかし、寛弘8年(1011)三条天皇の践祚に際して、有力な後見人がいないことが理由で敦康親王の立太子は実現せず、道長の外孫である敦成親王(のち後一条天皇)が春宮に立てられた。
このように、残念ながら、隆家が"光る"ことは出来なかったのである。

藤原実資(賢人右府)　～どちらかというと“黒光りする君”～
「小右記」(小野宮流の右大臣実資の日記)の作者

藤原北家嫡流・小野宮流の膨大な家領を継ぎ、有職故実に精通した当代一流の学識人であった。藤原道長が権勢を振るった時代に筋を通した態度を貫き、権貴に阿らぬ人との評価を受けた(WIKI)。最終的に従一位・右大臣に昇り、「賢人右府」と呼ばれた。実資の残した日記『小右記』はこの時代を知る貴重な資料となっている。

■永延二年***「朝議已(すで)に軽し」***～最近の朝廷の儀式はなってない、軽んじている。昔はよかった、重厚だった～
藤原為光の子の誠信(さねのぶ)25歳が参議になったが、32歳であった実資が抜かれてしまう。これは父の為光が摂政兼家の宅に深夜押しかけ、懇願した結果で、単なるコネなのである。出し抜かれた実資は嘆いているわけである。

■長徳三年**「用賢の世、貴賤研精す」**～賢い人を用いる世の中であれば、身分が尊くても卑しくても自分の実力を磨くであろう～
藤原道綱(道長の異母兄)は無能で有名だった、実資よりも先に大納言に就任、またもや自分より能力のない奴に先を越された、今は用賢の世ではないのか?前例がないではないか。
さらに**「法師を大臣に任ずるを以て大納言と為すべきか」**～強いて言えば“法師”すなわち道鏡が天皇に気に入られただけで太政大臣になったという悪しき前例はあるが、あれ以上に道綱ほどの無能な奴がなるのは許せない。

■長保元年**「未だ禽獣に人の礼を用いるを聞かず、ああ」**～禽獣=猫、内裏で飼っていた猫が子猫を生んだ、その際、“生養”(うぶやしない)という儀式(赤ん坊が生まれた時にやる儀式)を猫にやったと言っている。詮子及び道長らが盛大にこの儀式をやっているのを聞いて「これ、聞いたことないぞ、ペットの猫が子を産んだことで朝廷をあげての儀式をやるのか?どうかしてるぜ。(枕草子にも記されている、ひどいのはその猫に乳母まで付け、名前も「命婦の御許(おとど)」としたとか)

■長和二年**「素飡尸位(そさんしい)、若しくはこれを謂(い)うか」**～給料泥棒(寝てるだけで飯が食える人)とはこういうやつの事を言うのだ～
道綱が儀式の責任者だったがこれを辞退、おはちが実資に回ってきた、儀式の作法がわからない道綱が実資に無茶ぶりをした、これに対し実資も激怒、家で犬が子を産んだから行けないと答える。
さらに道綱に怒る**「愚なり愚なり、天遣(てんけい)避けがたきか」**～愚かだ、天罰下るぞ、あいつは!～
道長が三条天皇に「天が辞めるべきと言っている」と譲位を迫った際に、同行した道綱も同様に圧力をかけた、と言っている。百歩譲って道長は許容範囲としても道綱ごとき無能が何を言うか、天皇にモノを申すべき者か、おまえは!と言っている。

■寛仁二年**「満座只此の御歌を誦すべし」**～みんなでこの歌を歌いましょう～
道長は戯れでうたった「この世をば我が世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば」に対し、実資に返歌を求める(実は道長が酔っ払いながら、戯れて歌った歌だと言われている)、それに対し「何と良い歌なんだ、このような歌に返す歌などない、みんなで歌いましょう」と言った。これは半分称賛、半分嫌味であることは間違いない。このような戯れの歌に返歌などやるものか、という反骨心がうかがえる。

■治安二年**「人を難ずる事、還りて愚を表はすのみ」**～安易に人を非難すると還って自分の無知を曝け出すことになるから気をつけろ～
藤原斉信が、“宣命(せんみょう)”を女官に渡す際、左手を使った実資に対し、右手で良いのでは?と言ったことが宮中で話題となった。ここで実資は反論するのである。前例に従ったまでのこと、決まり事なんだ、左手でやった方が作法に対し合理的であるというしっかりとした先例があるのだと強調する。

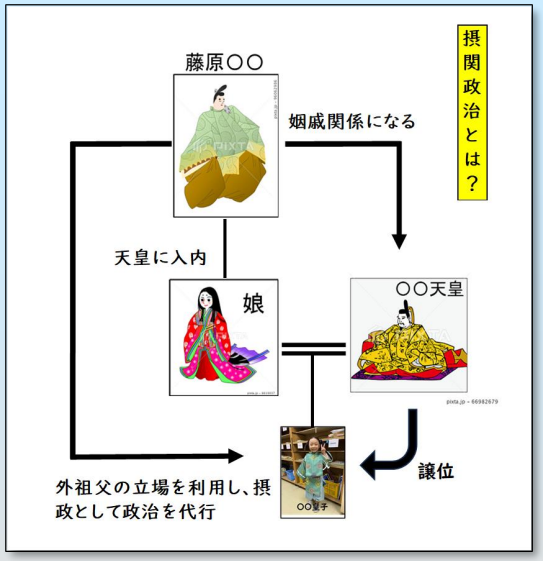
実資の人物像→　嫉妬深くもあり、皮肉も多い、辛辣でもある。そうであっても、信頼されており、言ってみれば「ご意見番」とでも言えるのか?
しかし、残念ながら、小野宮流は政権の中心になることはなかった(光ることは出来なかった)。

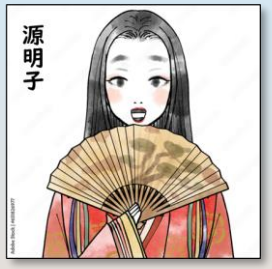
ではなぜ道長は光ったのか？

摂関政治とは？

近年の研究においては、歴代の天皇の性格や取り巻く状況にもよるが摂関政治期の天皇は必ずしもその権力は無力ではなく、自ら積極的に政治的役割を果たそうとする天皇が多かったことが判明している。しかし、天皇と公卿や官司の間で文書をやりとりする際には摂関（内覧も含む）が介在させて行うことが多く、特に叙位・除目などの人事に関する御前の儀式には摂関が文書の内容を確認する行事が故実として盛り込まれたことにより、摂関の存在がなければ儀式が成立しないことになっていく。これによって朝廷の人事権を摂関が把握することに成功し、それが摂関の存在を維持することにつながったと言える。

ただ、この境遇にたどり着くためには、娘をたくさん産んで、その娘を天皇に入内させて、その娘が皇子を生んで、その皇子が天皇になる、という工程？を踏まなければならない。





	源倫子 964-1053	源明子 965-1049
988	(24)彰子誕生(一条院妃)	
989		
990		
991		
992	(28)頼通誕生(関白)	
993		(28)頼宗誕生(右大臣)
994	(30)妍子誕生(三条院妃)	(29)顕信誕生(右馬頭)
995		(30)能信誕生(権大納言)
996	(32)教通誕生(関白)	
997		
998		
999		(34)寛子誕生(敦明親王妃)
1000	(36)威子誕生(後一条院妃)	
1001		
1002		
1003		(38)尊子誕生(源師房室)
1004		
1005		(40)長家誕生(権大納言)
1006		
1007	(43)嬉子誕生(後朱雀院妃)	

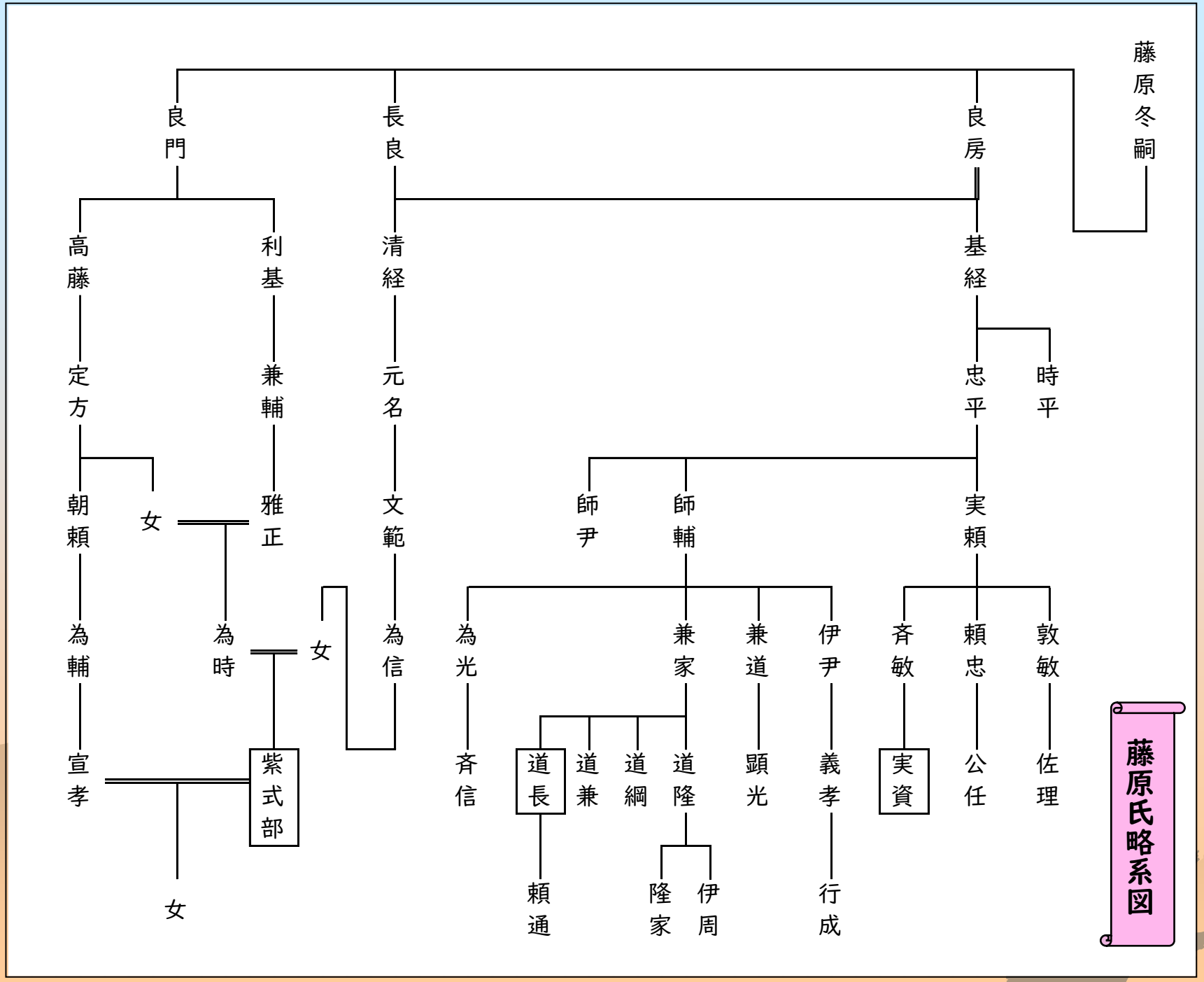
そう考えると、道長には数多くの娘がおり、それらの娘が入内し、皇子を生むという、絶好の環境をつくれたことは非常に大きい。その原動力となったのが、源倫子・源明子という二人の妻であったことは間違いない。しかも彼女らは双方とも天皇家の血を引く貴種である。二人はそれぞれ六人の子を産んでおり、しかも健康で長命でもあった。王朝絵巻の女流作家のように光りはしなかったかもしれないが、〝光る君“道長が頂点を極めることが出来た背景に、この二人の女性の存在を見逃すことは出来ない。

■源倫子→「北の方」→儀式婚『小右記』
左大臣源雅信の娘、宇多天皇の曽孫、二男四女の母

■源明子→「高松殿」→私通婚『小右記』
前左大臣源高明の娘、醍醐天皇の孫、四男二女の母

源明子は、実際は倫子より先に道長の妻になっていたとされており、倫子に本妻の座を奪われる格好となった、との説もある。父の源高明は政変に巻き込まれ没落しており、道長の姉 詮子に養女のごとく保護され可愛がられたものの、後ろ盾の大きさの違いは覆せず、子どもの代に至るまで苦汁をなめることとなる。ただ、道長の彼女に対する扱いは、倫子のそれと同等であったようで、倫子・明子双方の出産状況からもそのことが窺われる。
それでも40代になるまで出産を続け、倫子と同数の6人の子を産んだ他、娘婿に迎えた皇族の世話も担当するなど、道長の躍進を目立たないところで支える役目を担っていた。
しかし、子の頼宗や能信は、やがて異母兄弟の頼通、教通といったいわゆる「摂関家」と対立し、摂関家出身の女性を生母に持たない尊人親王(後三条天皇)の即位に尽力して、結果的に摂関政治の終焉に力を貸すことになる。
そこには、何とも皮肉な結末が待っていたと考えざるを得ない。

【資料集】


藤原氏略系図
藤原冬嗣
良門
長良
良房
高藤
利基
清経
基経
定方
兼輔
元名
忠平
時平
朝頼
女
雅正
文範
師尹
師輔
実頼
為輔
為時
女
為信
為光
兼家
兼道
伊尹
斉敏
頼忠
敦敏
宣孝
紫式部
斉信
道長
道兼
道綱
道隆
顕光
義孝
実資
公任
佐理
女
頼通
隆家
伊周
行成

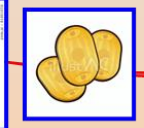
繰り返し受領に任命する

家司・家人・郎等
(主従関係)

地方社会の
富を奪取
私腹を肥やす

受領任国
(特に大国)

富を還元する



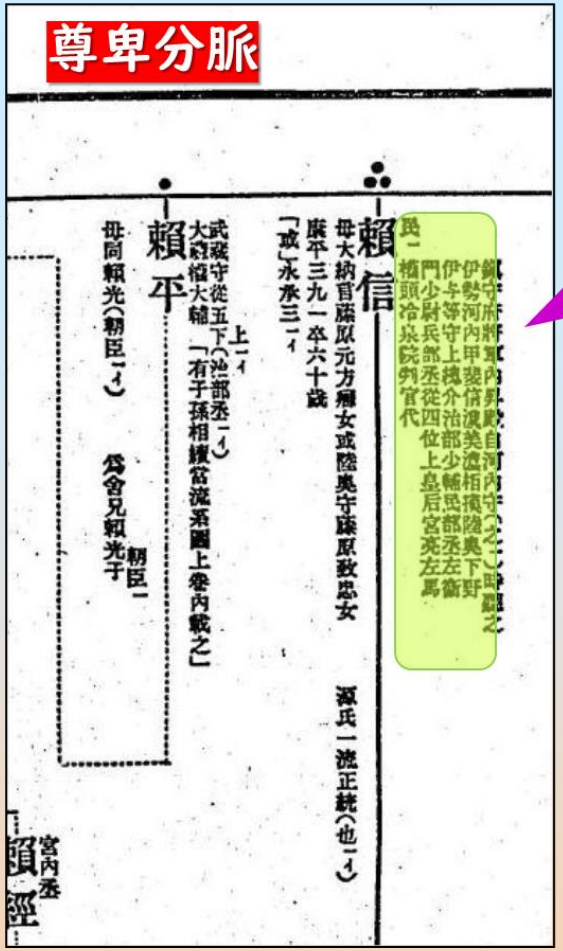
受領とは？

国司四等官の筆頭者で(〇〇守)、
令制国に赴任して行政責任を負う者
(例)

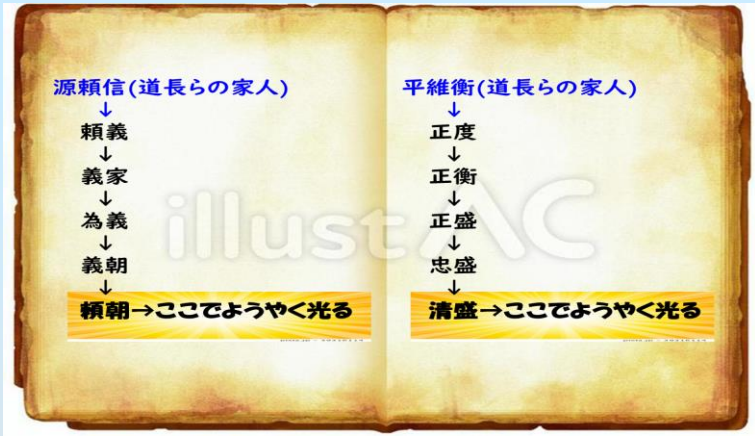
相模守>相模介>相模掾(じょう)>相模目(さかん)

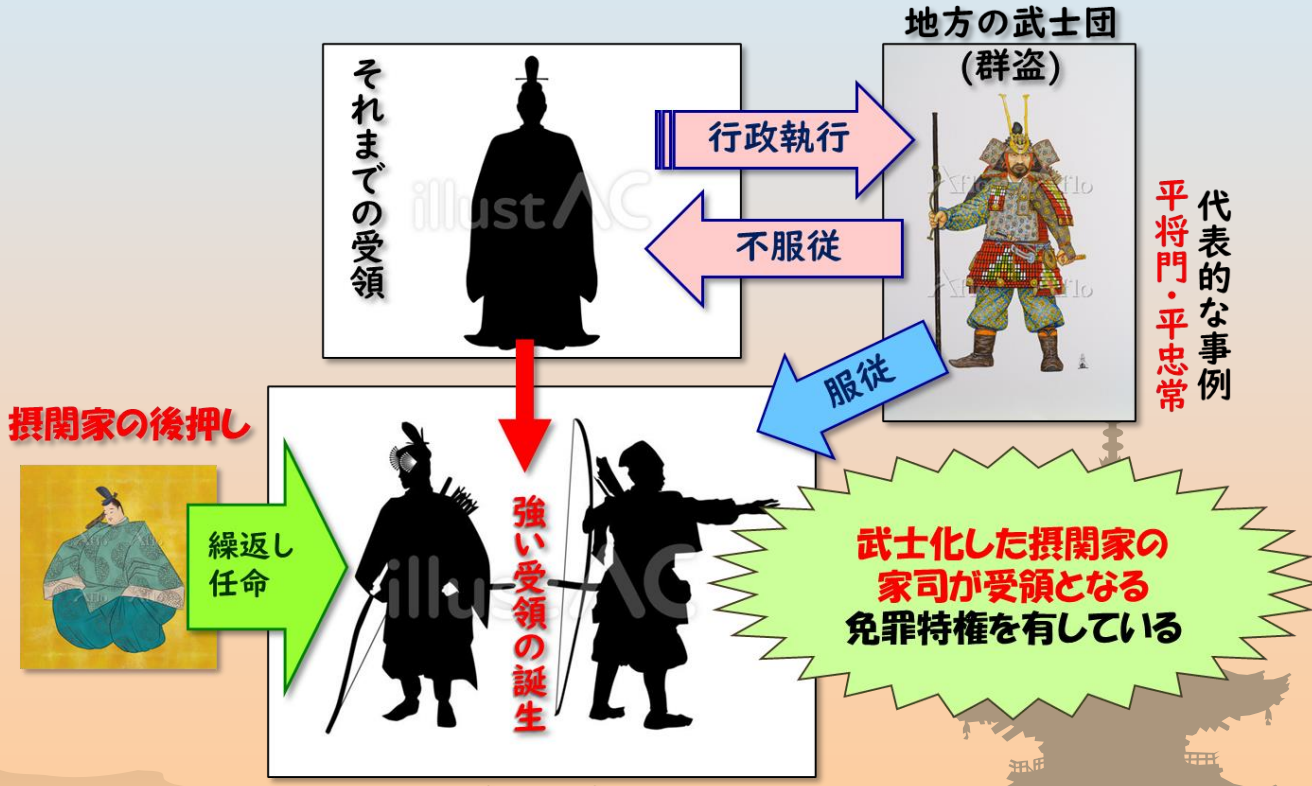
※但し、上総・常陸・上野は親王任国なので
臣下は「守」になれず、「介」が筆頭者である

大国	13	陸奥・常陸・上総・下総・上野・武蔵・越前・近江・大和・河内・伊勢・播磨・肥後
上国	35	山城・相模・越後・摂津 他
中国	11	安房・若狭・薩摩・能登 他
下国	9	和泉・伊賀・志摩・飛騨 他



河内、伊勢、甲斐、信濃、美濃、相模、陸奥、下野、伊予守、上総介





代表的な事例

藤原保昌→大盗賊「袴垂(はかまだれ)」を威厳で圧倒して捉えた

源頼光→大江山の酒呑童子(しゅてんどうじ)討伐や土蜘蛛(つちぐも)退治

源頼信→「平忠常の乱」の忠常を戦わずして降伏させる

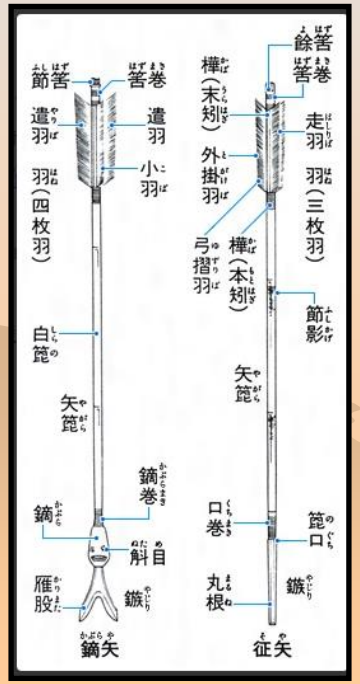
"女真"とは？

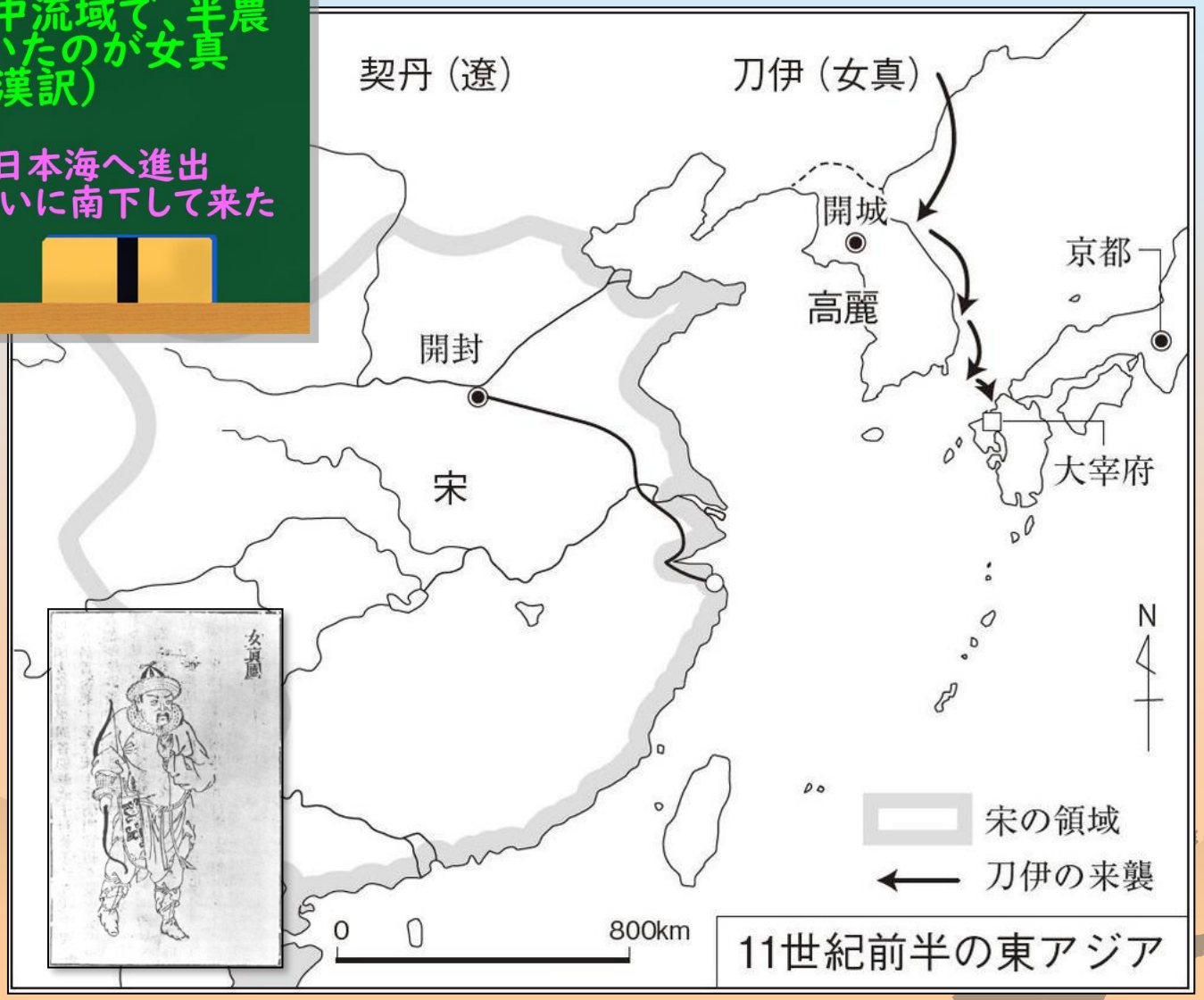
ツングース系半農半狩猟民族

１０世紀以降は「遼」に支配されていた

その中の東部の松花江中流域で、半農半狩猟生活を送っていたのが女真（ジュルチンの漢訳）

ウラジオストク方面から日本海へ進出
日本海沿岸を朝鮮半島づたいに南下して来た





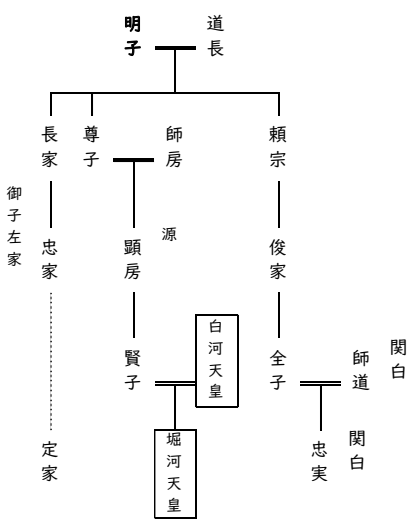
道長は強運であったのか？

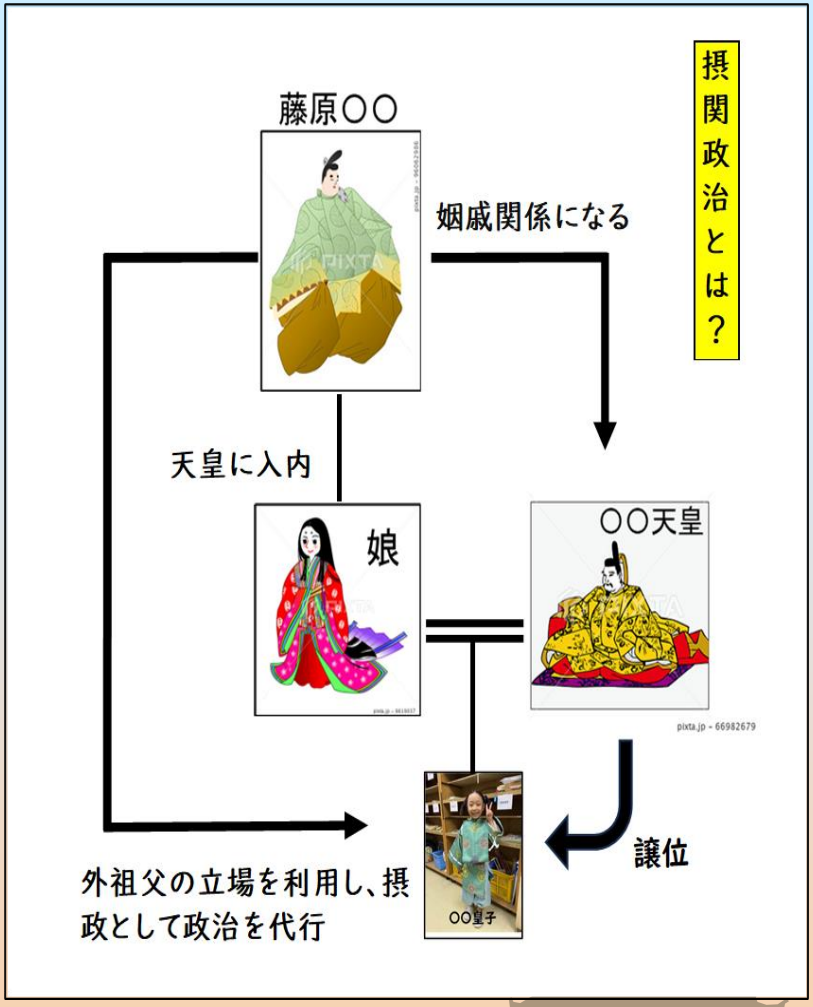
・兄道隆と道兼が相次いで病死
・倫子が娘を四人も生む
・彰子が二人の皇子を生む

もしもではあるが、

・藤原兼家がもう少し長生きしていれば…
・花山天皇があれほど早く退位していなければ…
・冷泉院皇子為尊親王や敦道親王が早世しなければ…
・病弱であった一条天皇が早世していれば…
・一条が彰子との間に皇子が生まれなければ…
・三条が道長より長生きをして敦明親王が即位していたら…

～道長は光る君にはなれなかった～





参考図書：桃崎有一郎『京都を壊した天皇、護った武士』『武士の起源を解き明かす』『平安王朝と源平武士』